



(←HP)

「無知の知」

校長 菅谷 和孝



「無知の知」これは哲学者の父と呼ばれるソクラテスの言葉で、「無知であることを知っていることが重要である」ということです。つまり、自分の知識や理解には限界があることを認識することで、新たな知識を求め続ける心構えを育むためのもので、自己過信せずに他者の意見や新しい情報を積極的に取り入れることが重要だといっており、「知ったつもりにならずに、自分がいまだにわからないことはわからないと認めるべき」という考え方です。物事は大抵仮説を立てて立証していくものです。目的や目標がなければプランが立てられません。したがって、事実を前提に立てた仮説なのか、仮説を前提に立てた仮説なのか。これが混ざってしまうと、話が根底から壊れてしまいます。ソクラテスはこのことから、「問答法」ということを生み出しており、相手に問いを投げかけ、次にその回答に対してさらなる質問を重ねることで、相手の考えの矛盾や不備を露わにするというものというわけです。この方法に似ているのが、日本の大手自動車会社トヨタでも使用されているトヨタ式5W1H と言われているものです。通常5W1H とは「When(いつ)」「Who(誰が)」「What(何を)」「Why(なぜ)」「How(どのように)」という5つの要素を指します。6W1H として「Where(どこで)」が入ることもありますが、トヨタ式は「Why(なぜ)、Why(なぜ)、Why(なぜ)、Why(なぜ)、Why(なぜ)+ How(どのように)」で問題や課題に正対し、真の要因を見つけ出すことで、確かな解決策を打ち出すという方法です。

よく、物事に対して質問する時「どうすればいいですか」「ではどうしますか」と聞いてくる人がいます。一方、何か考えがあり、何らかの意思や信念をもっている人は「私は〇〇だと思いますがいかがですか」「〇〇が良いかと思いますがいかがいたしましょう」などといった、意見やプランをもった質問をすることができます。ノープランで相手に意見や考えを求めてばかりいては、うまくいかなかった時に他人のせいになり、愚痴や文句が多くなったりします。しかし、考えや意見を添えて質問や提案ができる人は一緒に考えているので、前向きな考えや新たなアイデアが生まれてきます。つまり、何も考えていない無知の状態では、その人から良いものが生まれてこないということです。加えて無知には5段階のレベルがあるとも言われています。

<レベル0 無知の欠如> 知らないことが無い、つまり何でも知っている状態。

<レベル1 知識の欠如> 知らないけど、知らないことには気づいている状態。わかった気分になっている状態。調べようと努力できる状態。

<レベル2 気づきの欠如> 知らないし、知らないことが何か気づいていない状態。知らないが知ったかぶりをしている状態。

<レベル3 過程の欠如> 知らないし、知らないことに気づいていないことに対して、どうしていいかわからない状態。

<レベル4 無知以前> 無知自体知らない状態。

※ソクラテスはおそらくレベル1・2のことを言っているのだと思います。

知らないことをいかに知っているかのように誤魔化して、表面上見繕っても苦しいのは自分です。本質に迫ったときに困るのは自分です。「無知の知」を知ることで、今後の人生は大きく変わっていきます。今知っていること、理解していること、今見えているものがすべてではありません。「本当は・・・」を知ること、その本質を見抜くこと、その力を活用しながら多くの情報を得ることが大切です。世の中には SNS を含め多くの情報があります。その情報すべてが正しいわけではありません。中にはフェイクであったり、善人をだましたりするような悪の情報もあります。無知の知だからこそ、表面上だけでなく、その情報の真意・本質を見抜き、正しい多くの情報を得ることができるようになります。そして、その情報を駆使し、世界にいる多くの人々とコミュニケーションを図り、AI と共存しながら活躍できる人材が、これからの社会では求められています。是非、夏休みを通じて、藤中 Action「Next one」「Another one」「More over」を体現してほしいと願っています。